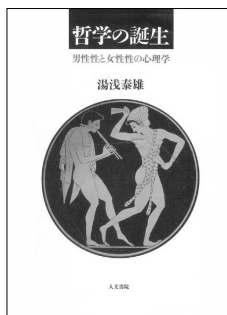


湯浅泰雄著

## 『哲学の誕生——男性性と女性性の心理学』

(人文書院・二〇〇四年七月)

石原 みどり



「哲学の誕生」という硬派な主題に、いささか軟派な「男性性と女性性の心理学」という副題である。どこかミスマッチングなタイトルに惹かれて本書を手にとってみた――。

男／女の二極化・差別化は古今東西にさまざまな形で偏在している。文化的・歴史的に作られた違いについて脳生理学的に説明できる部分がある。と聞けば、この両性への分離とペアリングは自然に適っているように見え、今もって健在である。メディアからも、父性的／母性的役割を背負った男／女のイメージと物語が大量に流されている。それは送り手が一方的に作り上げたものではなく、伝統や慣習に馴染んだ受け手が抵抗なく受け取る、あるいは自ら求めるイメージでもある。つまり送り手と受け手は其共関係にあるといえよう。しかし他方では、人間を無反省に男／女に二極化することに異が唱えられて久しく、性を

包括的に考え直しながら性の不均衡・不平等の解消を目指すジェンダーフリーの流れに、我々はもはや逆行できないし、すべきではない。こうしたなか、湯浅泰雄の『哲学の誕生』が副題に「男性性と女性性の心理学」と掲げているのは少々時代錯誤に映る。

「はじめに」では、湯浅泰雄の探求を駆り立てているものが述べられているので、まずここから見てみよう。それによると、モラルの退行が懸念される現代社会にあつて、人間が他者や異文化と隣接しつつ、本来的な人間として「いかに生きるべきか」「何を信じて生きるべきか」という倫理と信仰の問いを追求し、あるべき人間像を提示することだ。たしかに、凶悪な犯罪や不正事件、性的虐待、暴力、戦争やテロ等々について報道されない日はない世界を生きていく我々自身にとつて、これらは切実に迫ってくる問いであり、湯浅がそのように動機づけられるのは肯ける。ただ彼のこうした探求は今に始まったことではない。湯浅は戦後以来、古代から現代までの広範囲の相異なる哲学思想、倫理、宗教、歴史の中に、人類が共通して理性と霊性(超越的な力を感じる精神性)をもっていること、そして内なる霊性を成長させ、よりよい人格へと自己形成していく方法を模索してきた。それは単に整合性を具えた理論操作ではなく、つまり、学問として口先だけで説くのではなく、文字通りの実践方法を探る営みである。具体的には、心身一如を説く東洋思想を調べ、それに基づく瞑想、ヨーガ、あるいは芸道における身体鍛錬といった「修行」による経験知を、借り物の西洋哲学の論理的方法

によらず、自らの経験を伴わせながら心理学的に解明するのである。ここが、身体的・個人的経験を括弧に入れてきた西洋哲学の形而上学的態度——それはたとえ理論を第一部、倫理の実践を第二部と分けて考えたカント、あるいは心理学を退けた新カント主義などに顕著であるが——と袂を分かつところである。だからといって、東洋思想の枠内に閉じこもり、あるいは単純に東洋的身体観を西洋に持ち込んで心身二元論の克服を企てたりしないところが湯浅の特長である。西洋の哲学・思想のなかでも、人間の存在基盤である暗く捉えがたい生身の身体へと目をむけ、東洋の身体観と親和性をもっているベルクソンやメルロー・ポンティ、フロイト、そしてとくにユング<sup>1)</sup>といった人たちの思想と連動させながら、あるいは逆に彼らに触発されながら、東西の違いを乗り越えようとしているのである。湯浅の仕事は東西を行き来しながら経験知を理論知へと、また逆に理論知を経験知へと相互にフィードバックさせる取り組みといえよう。

『哲学の誕生』もこの取り組みの延長上にある。ひとまず章立てと内容について、ごく大まかではあるが次のとおりまとめておく。

序論「人間存在の自己矛盾」：身体的・精神的人間が、自然内存在であり、かつ自然外存在でもあるという矛盾をかかえていること、そして性<sup>エロステイシス</sup>と死という身体現象の問題を外しては、これらと直結する倫理と宗教を扱うことはできないことが論じられる。第一章「古代における哲学と心理学」：心理学の観点から西洋古代の哲学を眺め、哲学がどのようにに倫理

と宗教につながっていたか、また両者がいかに分かれていたかが述べられる。第二章「意識の発達史」：神話の心理学のうちに人間の発達過程が探られる。男性性が確立していくこと、そしてそれに反比例して、女性性は底流化していくことが示される。第三章「哲学誕生」：神話から哲学への発展は古代ギリシアにのみ起こったもので、その状況と理由を調べ、東洋の伝統との違いを明らかにすることが目指される。第四章「理性と霊性」：筆者が最も力を入れた部分とされる。ソクラテスの生涯と倫理<sup>エロス</sup>（性）と信仰<sup>テュグ</sup>（死）についての彼の考え方を心理学的観点から検討している。第五章「男性性の帝国」：男性性が支配しているローマ帝国の倫理と宗教のあり方がテーマとなっている。ストア哲学、ユダヤ教、それに対抗して生まれたキリスト教など、これらが流行する、あるいは迫害される政治的背景と社会的集団心理が探られる。第六章「神の女性性」：ユングのキリスト教についての理論を踏襲して、旧約、新約聖書の物語に「女性性」と「霊性」の復活を見出し、その内実と重要性を説く。終章「霊性問題のゆくえ」：現代の我々自身の問題として、統合的な人間のあり方を問う。

四〇〇頁余りからなる『哲学の誕生』で扱われる対象は多岐にわたっており、湯浅の視野と関心の広さをうかがうことができるのだが、本書で焦点となっているのは、西洋哲学の土台となり、哲学を育んできたものである。湯浅は（ハイデガーの考えを受けて）、ソクラテスを結節点とした彼以前のギリシア・ローマ神話と哲学、彼より後の形而上学、またそれ

と並行した古代の諸宗教、ユダヤ教、キリスト教、錬金術等々を心理学的な視点から見直す。それによって、「倫理の実践や経験から離れて純粹な理論知を追究し近代合理主義を生み出した西洋」という単純なイメージを覆し、西洋には東洋的な知のあり方が欠如しているところか、近似した部分が具わっていることを示す。ここに、両者が心身関係や、深層心理、霊性の問題について同じ土俵の上で語り合える可能性を読み取ることができる。

本書は専門的な哲学書ではないし、確かに書き散らした感じが強い。それは湯浅自身が「まえがき」と「あとがき」で、「哲学のことはよくわからないが人生の生き方について考えた」という読者に、入門書として読んでいただきたい」と断っているとおりである——ただ、生き方について考えようという一般の読者のための入門書としては手が出しにくいタイトルと分厚さでもあり、内容的にもむしろ「研究ノート」と言ったほうがいいようだ。いわゆる学術的観点からすれば彼のアプローチは最初からバイアスがかかっている。というのは、対象のうちに探り出そうとしているものはすでに決まっているからである。それは「いかに…」「何を…」という、時代と場所を超えた倫理的、宗教的要請であり、そしてそれらがどのように発動しているか、である。しかし、どのような研究にしても完全な客観的立場からの考察はなく、何か目論見をもって、ある程度の成果を見込んでなされるのだから、「捏造」でない限り、バイアスがかかること自体は問題ではなからう。

ここで問題にしたいのは副題について、つまり男性性と女

性の心理を探る際の視点についてである。このテーマについて次のように筆者の考え方が集約されている。「神話の世界では、宇宙のすべての出来事は男性神と女性神の活動によって生まれていると考えられていた。心理学的観点からみれば、それらのイメージは、人間の心理を宇宙に投影した産物である。したがって神々の男性性と女性性は、実は、人間の心理に潜在する本性を表現しているわけである。人間形成の目標として、男性性と女性性を統合するという考え方は、『自我』とは異なる真の「自己」を求めてゆくところに生まれてくる」(本書二七七頁、傍点は評者による)。文学にかぎらず、神話も聖書も人間が紡ぎ出す物語であり、そこに人間の心理が投影されているという指摘はもつともである。そして男／女を二大原理とする考え方は東洋思想でも馴染みあるもので、男性性と女性性、すなわち、明瞭な意識部分と無意識の暗い部分を自覚してバランスよく統合するのが理想の状態だというのは分かりやすい。しかし分かりやすいだけに注意が必要ではないだろうか。湯浅は、「神々のイメージは人間の本性を表現している」としているが、どこまで人間の本性を表現できているのか、そもそもここで物語を紡ぎ出す人間とは誰のことか、また現代においてなお男性性／女性性という分け方を用いるメリットはあるのか、いくつも疑問が湧いてくる。

たとえば本書では、ホメロスの叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』が取り上げられている。これは神話をもとにしてトロイア戦争を謳い上げた、男たちのドラマである。本書では、勇敢さや正義心、知的論理性が男性性に属している

こと、またそうした男性性が支配的であること（それが近代まで続いてきた）が指摘される。さらにその理由として、古代ギリシアのポリスが男性によって行われる戦争と外交交渉によって成立する社会であつたからとされている。しかし事はそう単純ではないだろう。古代ギリシアのポリスは、父権社会を構成していた狩猟民族アーリア人が侵入して誕生したものである。見逃せないのは、侵入とともに母権制から父権制への移行があつたことである。豊潤で多産の太母の世界は無秩序で暴力に充ちていたが、その移行によって、「神々と人間の父」ゼウスの登場によって秩序ある世界体系へと作り替えられ、もともとカオス的であつた地母神たちの一部はゼウスの妻や娘となり、秩序を支える存在へと変わつていった。その代表格が結婚の神ヘラーや処女神アテナ、美の神アフロディテであり、その容姿といえは均整のとれたギリシアの彫刻を思い浮かべてもらえばよい。「女性の立場」から見れば、これは母性原理が排除されていく過程にはかならない。したがつてこれはスムーズな移行ではなく、母権と父権とのすさまじい闘争なのである。この闘争についてはヘシオドスの『神統記』が血なまぐさいエピソードとして語っているが、本書では『神統記』は触れられていない。また本書では、母権制から父権制への移行を、英雄（男性性Ⅱ精神・理性）が、自己を呑み込もうとする無意識（女性性Ⅱ本能・感情）を脱していく発達の過程と捉えている。このような解釈は「男性の立場」からなされていると考えられるだろう。そうすると、自我意識の発達とともに封印されていた意識下の偉大なる女

性性が、身体訓練によって気付かれ、回復し、最終的に両性具有的・全人格的なあり方へ至るという筋書きも、「男性の立場」から作られたものに思われてくる。湯浅がユングの心理学をほとんど全面的に受け入れているところからも、この判断はあながち間違ではないだろう<sup>2)</sup>。

言うまでもなく、いずれか一方の立場を主張することは、湯浅の意図するところではない。彼の最大の目標は、他者同士が出会い、宥和な関係を築けるよう、それぞれが人格を形成し倫理的な意識を高めていくことである。しかし、神話に探られた男性性／女性性——しかも「男性の立場」から捉えられたもの——を神話の中に止めず、人間の「普遍的な本性」として、現代に実際に生きているわれわれに適用するというならば、それは湯浅の意に反して、齟齬を来すであろう。一人の人間の中に同居している理性や感性、細やかさ、たくましさ、狡猾さ等々、諸々の性質や能力を男性性／女性性としてカテゴライズすることで、逆に人間を男性／女性の枠にはめてしまふこと、また人間同士に対立や差別、抑圧などの悲劇を生みだしてきたこと、現に生みだしていることを見れば、この二項を使うこと自体に慎重さが要する。半世紀にわたつて一貫した態度で倫理と宗教という普遍的な問題に取り組み続けている湯浅の姿は見習いたい。しかし、両性具有的な人格形成を目指すという図式も一貫しており、さらに言えば、ユングと共有している「男性の立場」も一貫しており、本書ではそれがより克明になっているように思われる。男性性／女性性という切り口で古代西洋に遡り「温故知新」とするに

は、「故」を「温」め、そこから現代に生きる我々が「新」しき「知」るプロセスに相当工夫がいるだろう。本書に必要なのは、現代人の心理学的観点と思われる。

## 註

(1) 湯浅は心理学者ではない立場から、とくにユングを研究し、彼の考えに共鳴している。ユングについての著作として、『ユングとキリスト教』(人文書院、一九七八)、『ユングとヨーロッパ精神』(同、一九七九)、『ユングと東洋』(同、一九八九)があり、訳書にユング／ヴィルヘルム『黄金の華の秘密』(共訳、同、一九八〇)、ユング『東洋的瞑想の心理学』(共訳、創元社、一九八三)、『ユング超心理学書簡』(共訳、白亜書房、一九九九)『ユング、パウリ往復書簡集』(共訳、ビイング・ネット・プレス、近刊)などがある。

(2) 本書の副題も、「ユングが神のイメージの女性性について論じていたことから示唆を得た」とされる。ユング心理学が、「女性、男性を問わずその精神のあり方を無意識、霊性を含めてよりダイナミックに扱うことを可能にする卓越した有効な手段である」と同時に、ユングが男性中心主義的な側面をもち、女性蔑視的記述を行っていることは事実であり、それに対してとくにフェミニズムの立場から検討・批判が加えられている。(デマリス・S・ウエーア『ユングとフェミニズム』村本詔司＋中村このゆ訳、ミネルヴァ書房、二〇〇二年を

参照) ユングに即して男性性、女性性を論ずるなら、ユングの二面性、そして批判を踏まえたユング受容が求められよう。

(いしはら みどり・美学／芸術学)